

主題展開は文中のどの部分に適用されるのか

女 鹿 喜 治

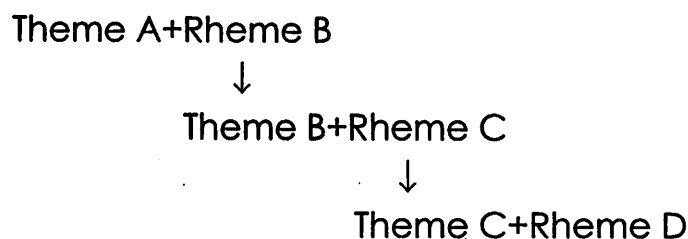
1. はじめに

主節と従属節を持つ複文や重文には二つ以上の主題と題述が含まれる。本論では、文がこのような複数の主題・題述を持つ場合、どちらの主題・題述が情報伝達の中心となるのかを Daneš (1974) による主題展開を用いて見てみる。そして、主節ばかりでなく、従属節の中の主題・題述も情報伝達の中心となり得るが、その場合、従属節は必ず図 (figure) となり、主節は地 (ground) となることを確認する。また、主題展開に関わり、図となる部分の文法的・意味的機能や談話との関わり合いの分析も同時に試みる。

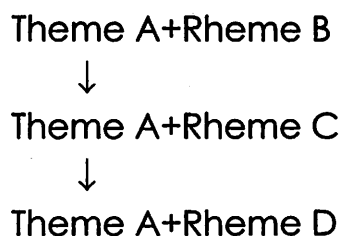
2. 主題展開

Halliday (2004) によると、メッセージは主題 (theme) と題述 (rheme) の二つから構成される。Daneš (1974: 118–20) はメッセージの中の主題が談話の中で展開されていく様子を主題展開 (thematic progression, TP) と呼び、その形式には次の (1a) – (1c) の三通りあると述べている。(便宜上、ここでは Daneš (1974) ではなく、Bloor and Bloor (2004) の表記の仕方を基本的に用いる。)

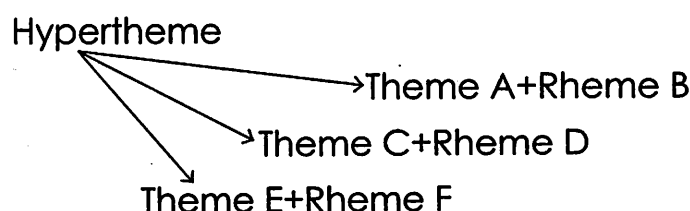
(1) a. 直線主題展開 (Simple linear TP)



b. 連続主題展開 (TP with a continuous theme)



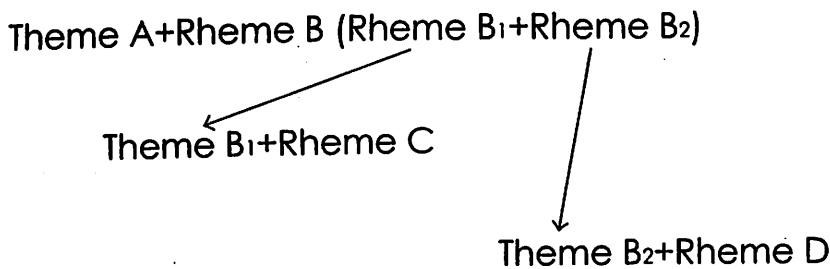
c. 派生主題展開 (TP with derived themes)



(1a) では、先行する文の題述が後続するそれぞれの文の主題となるように主題が選択されていく。(1b) では、先行する文の主題と後続する文の主題が同一で、そのまま連続して引き継がれていく。(1c) の hypertheme は、Daneš (1974: 119) によると、談話に関わる大きな主題で、これに関連した内容の文が複数後続する。山口 (2000: 28-9) によると、この主題は談話全体 (例えば、長い論述の一節とか段落など) の始めに選択されるマクロ主題 (macro-theme) で、後続する文がそれぞれこのマクロ主題の要素を主題の要素として談話を展開していく。つまり、マクロ主題は主題文 (a topic sentence) であり、これから展開される情報伝達の起点となる。通例、主題文は先頭に位置し、これから伝達される情報の枠組を設定する。したがって、マクロ主題はその段落全体のまとめ役のようなもので、これを見れば、その段落が何に関わる内容のものかおおよそわかることになる。段落全体が一つの大きな主題 (Hypertheme) と題述 (Theme A+Rheme B, Theme C+Rheme D, Theme E+Rheme F) で構成されているという見方もできる。

Daneš (1974: 210-1) が述べているように、(1a-c) はあくまでも理想的な主題の展開の仕方である。だが、実際の発話では、これほど単純ではなく、必ずしもそのままの形で使われるわけではない。むしろ、(1a-c) の形式が様々な組み合わせられる。例えば、(2) では、先行する文の題述の一部が後続する文の主題として選択されている。あるいは、(1a) の直線主題展開の形式が複数含まれていると考えることもできる。

(2) 分離題述形式 (the split rheme pattern)



次の (3a-d) と (4) はそれぞれ (1a-d) と (2) の直線主題展開、連続主題展開、派生主題展開、分離主題形式の具体例である。(イタリック体の語 (句) は主題展開に関わる部分を表す。文末の上付数字は各文の番号を示す。)

(3) a. I have *a brother*.¹ *He* is in the engineering department at *the university*.²
It is a good school.³

b. *Zinc* is a metallic chemical element.¹ *It* is a first-row transition metal and is the 24th most abundant element in the Earth's crust.² The most exploited *zinc* ore is sphalerite.³

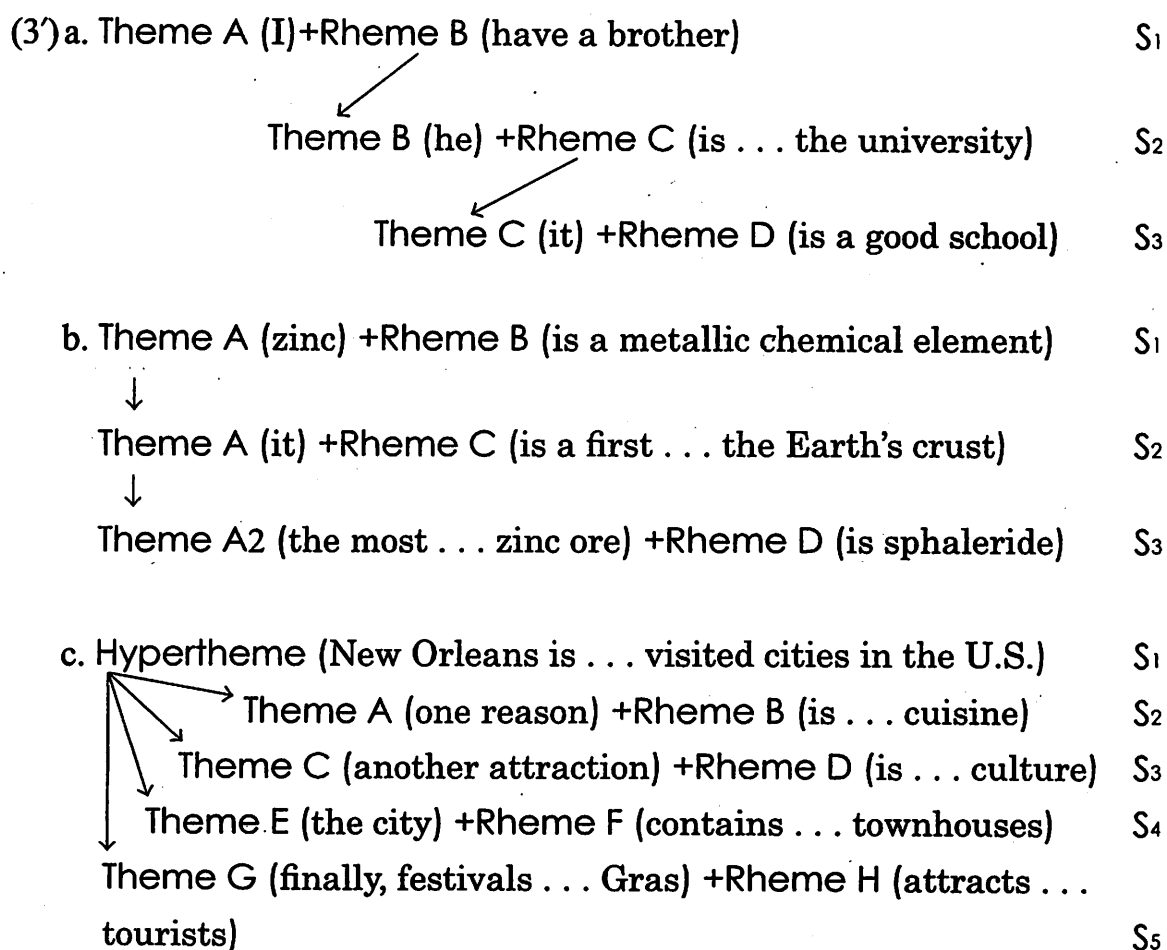
c. *New Orleans* is one of the top ten most visited cities in the U.S.¹ One reason is its indigenous cuisine.² Another attraction is its musical culture.³ The city contains many historic housing styles, including Creole townhouses.⁴ Finally, festivals such as Mardi Gras attract many tourists.⁵

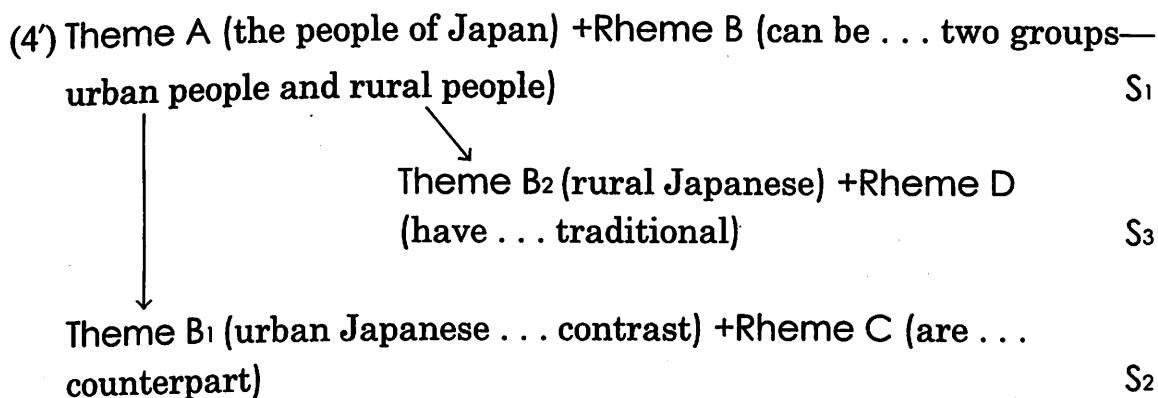
(4) The people of Japan can be divided into two groups—*urban people* and *rural people*.¹ *Rural Japanese* have most of the modern conveniences that urban Japanese have but they are in general more traditional.² *Urban Japanese*, in contrast, are not as traditional as their rural counterparts.³

(3a) で、第 2 文の主題 *he* は第 1 文の題述の一部 *a brother* から、第 3

文の主題 *it* は第 2 文の題述の一部 *the university* からそれぞれ派生している。(3b) では、第 1 文で、*zinc* が主題として現れ、それが第 2-3 文でも主題として保持されている。第 3 文の主題 *the most exploited zinc ore* には、*zinc* 以外の新たな主題 (*the most exploited* と *ore*) が含まれている。だが、これらと *zinc* の間にはコロケーション (*collocation*) による語彙的結束性 (*lexical cohesion*) が生じているため、主題展開が保たれている。(コロケーションについては、Halliday and Hasan (1974: 284-8) を参照せよ。) (3c) では、第 1 文がマクロ主題で、第 2-5 文がそれぞれマクロ題述として機能している。(4) では、第 1 文の題述の一部 *urban people* と *rural people* がそれぞれ第 2 文と第 3 文の主題 *Rural Japanese* と *Urban Japanese* になっている。これらの題述と主題はどちらも語彙的結束性によって結び付けられている。

この (3a-c) と (4) の主題展開を図示すると次のようになる。(例えば、 S_1 は第 1 文、 S_2 は第 2 文を表す。)





主題が (3a-c) と (4) のように切れ目なく首尾一貫した展開がされるということは一つのまとまった談話が構成されていることを意味する。したがって、主題展開は談話の中で情報がどのように伝達されていくのかを明らかにする有効な手段となる。

3. 具体例の分析

(3a-c) と (4) のような単文だけの例から考えると、文の主題と題述はどちらかが必ず主題展開に関わり、それから抜け落ちるものはないように見える。しかし、例えば、複文には主題・題述が複数含まれるが、この場合、主節と従属節の主題・題述はすべて主題展開と関わるのだろうか。それとも、一方だけが関わるのだろうか。主節は従属節と比べ、統語構造の上位にあるため、少なくとも、その主題・題述は主題展開と必ず関わるように見えるかもしれない。だが、実際には、主節ばかりでなく、統語構造の下位にある従属節の主題・題述も主題展開に連なることがある。ここでは、主に、そのような具体例をいくつか検討し、同時に、主題展開に関わる部分の文法的・意味論的な現象も見ていく。

例えば、(5) の第 4 文で、外置された *that* 節の中にある *whose* によって導かれている関係詞節は第 5 文から次の段落の第 10 文までのマクロ主題である。

- (5) Even today, most Americans pay very little attention to swimming as a sport.¹ . . . Every four years, however, the Olympic Games come along and people are, once again, aware of the swimmers.² After all, their victories

are an opportunity to feel patriotic.³

It is ironic, therefore, that one of the first American swimmers to win worldwide attention was an Olympic champion *whose greatest achievement came after she won her three Olympic medals*.⁴ Gertrude Ederle earned a gold medal at the 1924 Olympic Games in Paris (for the 400-meter-freestyle races).⁵ That year, the seventeen-year-old Ederle held eighteen world's records.⁶

But her triumph came in 1926.⁷ In the summer of that year she became the first woman to swim the English Channel.⁸ She was accompanied by a small boat carrying her father and sister.⁹ They encouraged her by singing patriotic songs like "The Star-Spangled Banner."¹⁰

(Allen Guttman, *Triumph and Tragedy of American Sports*: 56–7)

なぜなら、第5文から第10文は第4文の *whose* によって導かれる関係詞節の内容（「最も偉大な業績はオリンピックで三個のメダルを勝ち取った後のことだった」）を具体的に説明しているからである。この点で、この関係詞節が第4文全体の中で最も重要な情報を担い、断定的であるのは明らかである。このように、従属節が主題展開の起点となる一方で、主節は全くそれに関わらない場合がある。

一般に形式主語に後続する形容詞はその後の *that* 節の内容に言及する。例えば、*It is ironic that she became a teacher—she used to hate school* (OALD: 687) で、*ironic*（「皮肉な」）なのは形式主語の *it* が指し示す *that* 節の内容（「彼女が教師になった」）である。第4文でも、*ironic* なのは *that* 節の内容（「世界の注目を最初に浴びたアメリカ人水泳選手の一人がオリンピック・チャンピオンだった」）と解釈できるかもしれない。ところが、興味深いことに、第4文の談話内容から判断すると、*ironic* なのは *that* 節に従属する関係詞節（「最も偉大な業績は三個のオリンピック・メダルを勝ち取った後のことだった」）の内容である。これは、先行する談話内容が文中のどの部分を情報伝達の中心とするのかを左右する場合があることを意味する。

McCawley (1981: 124) は、叙述名詞 (a predicate NP) に関係詞節が続く場合、その関係詞の先行詞は直前の名詞ではなく、主語になると述べている。McCawley の考え方に従うと、第4文では、*whose* の先行詞は

an Olympic champion ではなく、one of the first American swimmers to win worldwide attention ということになる。したがって、that 節は (5') のように解釈できる。

(5') It is ironic, therefore, that one of the first American swimmers to win worldwide attention was an Olympic champion *and her achievement came after she won her three Olympic medals.*

だが、(5') の場合でも、ironic が言及するのはこの文の後半部分 (her achievement came . . . three Olympic medals) であって、前半部分 (one of the first American swimmers . . . was an Olympic champion) ではない。

一般に、関係詞節はどの（ような種類の）人や物を指すのかを表す、つまり、名詞を同定したり分類する機能を持つと言われる。しかし、第4文の関係詞節はこのような一般的な関係詞節とは機能が異なることは明らかである。

次の (6) では、第1文の the manly lover と the ancient half-sister の二つの主題がそれぞれ別個に展開されている。つまり、the manly lover は第2文の the manly lover から第3文の he、そして、第5文の he へ続く。それに対して、the ancient half-sister は第4文の the ancient half-sister へ引き継がれている。

(6) One day, we all went in our little motor-boat to an island we had never been to before, and for once the ancient half-sister and the manly lover decided to come with us.¹ . . . The manly lover was filling his pipe.² I happened to be watching him *as he very carefully packed the tobacco into the bowl from a yellow oilskin pouch.*³ He had just finished doing this and was about to light up *when the ancient half-sister called on him to come swimming.*⁴ So he put down the pipe and off he went.⁵

(Roald Dahl, *Boy*: 128)

したがって、(6) の主題展開を簡略化して示すと (6') のようになる。

- (6') One day, we all (Theme A) went . . . , and for once *the ancient half-sister* (Theme B) and *the manly lover* (Theme C) decided to come with us. S₁
- The manly lover* (Theme C) was filling his pipe. S₂
- I happened to be watching him [as *he* (Theme C) very carefully packed the tobacco . . .] S₃
- He had just finished doing this and was about to light up [when *the ancient half-sister* (Theme B) called on him to come swimming] S₄
- So *he* (Theme C) put down the pipe . . . S₅

第3文で、主節の主題Iは第1文の主題 *we* と指示的な結束関係にあり、主題が展開されているように見えるかもしれない。しかし、この文の意味は「たまたま彼の様子を見ていたら、彼は注意深く黄色いオイルスキンの袋から煙草をパイプの中に詰めこんだ」であることからわかるように、情報伝達の中心は *as* 節にある。このため、第1文から始まる主題展開に連なる主題は *as* 節の中の *he* であり、主節の中のIではない。意味的には、主節は *as* 節の内容に対してコメントを加えているだけで、*as* 節に対する付帯状況を表し、副詞的である。逆に、従属的な *as* 節の方が主節としての機能を果たしている。したがって、第3文の主節の中の主題と題述はどちらも主題展開とは関わりを持っていない。

同様に、第4文でも、第1文から始まる主題展開に連なる主題は主節の *he* のように見えるかもしれない。だが、「パイプに煙草をちょうど詰め終えて、火を付けようとしたら、腹違いの姉が彼を呼んで、泳ぎに来なさいよと言った」という意味からわかるように、第1文から展開される主題は主節の主題 *he* ではなく、従属的な *when* 節の中の主題 *the ancient half-sister* である。

(6) の従属節の *as* 節や *when* 節は主節を押し退けて、情報伝達の中心となっているが、当然のことながら、それぞれの接続詞の意味には何の変化もない。だが、次の(7)の *when* のように、接続詞の意味を保持しつつも、

感情を表す形容詞や過去分詞（例えば、glad や delighted）に後続する内容節 (a content clause) を導く接続詞 that の機能も併せ持つことがあることはこれまで見逃されているように思える。

次の (7) では、第 1 文がマクロ主題であるため、マクロ題述の第 2 文から第 7 文は祖谷（いや）という土地の特質に関する記述を表すことになる。このマクロ主題に直接関わる部分は、第 5 文では、従属節 (when a Japanese soldier . . . World War II) で、主節 (the world was surprised in the 1970s) ではない。

(7) Since ancient times, Iya has been a hideaway, a place of refuge from the outside world.¹ The oldest written record concerning the valley dates back to the Nara period.² . . . Later, in the twelfth century, during the wars between the Heike and Genji clans, fugitives of the defeated Heike fled into Iya Valley.³ From that time on, Iya became known as an *ochiudo buraku* (a refugee village).⁴ The world was surprised in the 1970s *when a Japanese soldier was found to have lived for almost thirty years in a Philippine jungle, still fighting World War II*.⁵ Thirty years is nothing.⁶ The Heike in Iya kept up their struggle from 1190 right up until about 1920.⁷

(Alex Kerr, *Lost Japan*: 23)

なぜなら、第 5 文で、マクロ主題の内容は主節（「1970 年代に世界が驚いた」）ではなく、when 節（「日本兵がフィリピンのジャングルにほぼ 30 年以上留まり、第二次大戦での戦いをずっと続けてきたのが発見された」）に関わるからである。また、第 6 文が主節ではなく、この when 節の内容に言及していることもこの解釈の裏付けとなる。さらに、談話内容から、when 節を削除すると、主節はマクロ主題との関連がなくなり、容認され難くなることもこの証拠となる。

注意すべきことに、when は時を表す接続詞であるもかわらず、同時に、surprised によって表される「驚いた」という内容を伝える that 節、つまり、内容節としての機能を持つようになっている。したがって、この文は the world was surprised in the 1970s *that* a Japanese soldier was found . . . World War II として解釈することもできる。この解釈は when 節が主題展開の一

部となったことによって、さらに強められている。これはマクロ主題の表す内容が *when* の意味解釈に影響を与えたものである。

これまで挙げた (5)、(6)、(7) の例は関係詞節や副詞節が主題展開の一部となるものばかりだったが、動名詞 (句) もそのような機能を持つことがある。

次の (8) で、第 2 文は「睡眠時間はほんのわずかだったが、幸いなことに、寝ると、すぐに深い眠りに入ることができた」という意味である。

(8) Already he had formed the habit of studying late and rising early.¹ He existed on a minimum of sleep, but was fortunate when he did go to bed in *sleeping quickly and deeply*.²

(K. M. Elizabeth Murray, *Caught in the Web of Words*: 34)

第 1 文との意味関係から、統語構造は別として、(8'a) のように、第 2 文の後半部 *was fortunate when he did go to bed in sleeping quickly and deeply* を副詞的に修飾しているように解釈すべきである。

(8') a. . . . but was fortunate when he did go to bed in sleeping quickly and deeply. (= . . . but, fortunately, when he did go to bed, (he) slept quickly and deeply.)

b. . . *he* (Theme A) had formed . . . rising early (Rheme B) S₁

↓
He (Theme A) existed on a minimum of sleep (Rheme C) S_{2a}

↓
. . . (*he*) (Theme A) . . . sleeping quickly and deeply (Rheme D) S_{2b}

したがって、(8) の主題展開は (8'b) のようになる。動名詞句の *sleeping quickly and deeply* は単独で *he* に対応する題述となる。それ以外の *was fortunate when he did go to bed (in)* は情報伝達の上では枝葉の部分であり、主題展開に関わることはない。また、述部動詞以外の部分 (この場合、動名詞句の *sleeping quickly and deeply*) が単独で主題展開に関わる事が可能である。これは主題展開が統語構造に直接的な影響を受けない証拠である。

さらに、名詞句が主題展開の起点となることがある。次の (9) で、第 1 文の前半部 *the idea of the movie star* は文ではなく、名詞句であるにもかかわらず、この名詞句が単独で後続する第 2-6 文に対するマクロ主題として機能している。なぜなら、第 1 文の後半部から第 2-6 文までの内容は映画スターに対する「(漠然とした) 知識」に関わるもので、この名詞句を具体的に説明する内容となっているからである。

(9) *The idea of the movie star, the perfect-looking woman or man who had breakfast at a glass table on a terrace where there are no mosquitoes.¹ No one ever went to the bathroom in movies.² I grew up assuming that movie stars did not.³ I thought it was terrible to be a regular human being.⁴ Movie stars did not look awful, ever. They never threw up.⁵ They never got really sick, except in a wonderful way where they'd get a little sweaty, get sort of a gloss on the face, and then die.⁶*

(Studs Terkel, *American Dreams: Lost & Found*: 59)

第 1 文の後半部 *the perfect-looking woman or man who had . . . there are no mosquitoes* は名詞句が関係詞節を従えた統語構造である。だが、実質的には、潜伏平叙文 (*concealed sentence*) で、(9'a) に等しい。(潜伏平叙文については、Kajita (1977: 44-76) を参照せよ。)

(9') a. *The perfect-looking woman or man had breakfast at a glass table on a terrace where there are no mosquitoes.*

また、第 1 文は *the idea of the movie star* を主語として、後半部の (9'a) を同格の名詞節にし、(9'b) のように解釈することも可能である。

(9') b. *The idea of the movie star was that the perfect-looking woman or man had breakfast at a glass table on a terrace where there are no mosquitoes.*

この場合、第 1 文に後続する第 2 文から第 6 文もこの同格の *that* 節と

実質的に同じものとして解釈し直すことができる。

第3文において、第1文のマクロ主題の内容から、主題展開と直接関わるのは主節の I grew up (「育った」)ではなく、分詞構文の assuming that movie stars did not (「映画スターはトイレに行かないものだと思い込んでいた」)である。当然、こちらの分詞構文に情報伝達の重点がある。また、談話内容から、主節はこの分詞構文なしでは容認され難い。一般に、「育った」というだけでは十分な伝達内容を持つことがあり得ないからである。このように、分詞構文も主題展開の一部になり得る。

これまでは、述部に含まれる主題・題述が主題展開に関わる例を扱ってきたが、次の (10) では、文中のすべての節や句が連続して主題展開に連なっている。

(10) *By this time, he had been watching with a mixture of awe and dread the meteoric ascendance of a firm called Dell Computer, after its young founder, Michael Dell, a University of Texas student who had started the company while in school, had adopted a whole different model for selling PCs.¹ Instead of selling them through dealers and other resale channels, he would sell directly to customers via mail.² He figured that the disadvantage of customers' not being able to get their hands on the box to take a look under the hood would be more than offset by the savings in not having to pay the extra cost of buying through a middleman.³*

(Jim Carlton, *Apple*: 161-2)

第1文は「この頃、彼はすでにデル・コンピュータと呼ばれる会社が破竹の勢いで成長している様子を畏敬の念と不安感が入り交じった面持ちで注視していた。この会社の名前は若き創立者のマイケル・デルというテキサス大学の学生から採られていたが、彼は在学中にこの会社の経営を始め、他社とは全く異なるパソコン販売のビジネスモデルを採用していた」という意味である。この文では、主節 (by this time, he had been ... Dell Computer) や副詞句 (after its young founder ... Texas student)、関係詞節 (who started the company ... for selling PCs) がそれぞれ別個な単位の情報として伝達されている。このため、次の (10) のように、解釈し直すこ

とができる。

- (10) a. By this time, he had been watching with a mixture of awe and dread the meteoric ascendance of a firm called Dell Computer.^{1a} The company was named after its young founder, Michael Dell, a University of Texas student.^{1b} He had started the company while in school and had adopted a whole different model for selling PCs.^{1c}

(10'a) の主題展開を簡単に示すと (10'b) のようになる。

- (10') b. By this time, he had been . . . *a firm called Dell Computer* (Rheme A) S_{1a}
- ←
- The company* (Theme A) was named. . . . *Michael Dell* (Rheme B) S_{1b}
- ←
- He* (Rheme A) had started . . . for selling PCs. S_{1c}

S_{1a} の題述 Dell Computer が S_{1b} では主題の the company となり、この S_{1b} の題述 Michael Dell が S_{1c} では主題の he となる。したがって、(10'a) は典型的な直線主題展開の文である。

(10) の第 2 文と第 3 文は「パソコンを売るための全く異なった販売手法」に関わる内容であることから、第 1 文の関係詞節 who had adopted . . . a whole different model for selling PCs はこれらの文に対するマクロ主題である。このことから、第 1 文は主題と題述を一つしか持たない文というよりも、複数の主題・題述が複合的に三つ組み合わせられたものと考えざるを得ない。

最後に、これまで述べてきたように、(5)、(6)、(7)、(8)、(9) で扱った例はすべて従属節 (句) が主題展開の一部となっているものである。Reinhart (1984) などによってすでに指摘されていることだが、このような従属節は一般に背景 (background)、つまり、地となるにもかかわらず、主節を押し退けて、前景 (foreground)、つまり、図となり、情報伝達の中心となることがある。次の (11) は従属節 (句) が地を表す例、(12) は図を

表す例である。

- (11) a. *While Max was doing the dishes*, Rosa sneaked out.
b. *Thinking about his beloved aunt*, Max scratched his ear.
c. The man *who stole Rosa's dog* beat him.

(Reinhart 1984: 796)

- (12) It was six o'clock *when the door suddenly opened*. (Reinhart 1984: 807)

(12) の副詞節は (11a) に対応するが、(6)、(7) の *as* 節と *when* 節がこの図を表す (12) に当てはまる。分詞構文では、(9) の第 3 文の現在分詞句の *assuming that movie stars did not* が (11b) に対応し、図となる。また、関係詞節では、(5) の第 4 文の *whose* 節と第 10 文の *who* 節が (11c) に対応し、図となる。この点で、(5)–(9) の例はすべて Reinhart (1984) の指摘通りである。

しかし、図と地の選択は話し手が現実をどのように認知したかを示すものと言われることがあるが、(5)–(9) や (10) のような具体例は (11)–(12) のような単純な例からはうかがい知ることのできない複雑な地と図の分布の仕方の一端を我々に示している。また、文そのものの解釈だけでなく、前後の談話内容によっても図と地の選択が左右され得ることもすでに見た通りである。

福地 (2003: 4–6) によると、複文の従属節が情報伝達の中心になると、主節は次のような特徴を持つ。

- (13) a. 主節の情報量が少ない

This is a town where you can stand in one square and see seven churches.
(福地 2001: 22)

- b. 主節が背景的記述をする

I'd been sitting there for at least an hour when the wind turned cold and began to shiver. (J. Braine, *Room at the Top* / 福地 2003: 5)

- c. 主節が話者の態度・姿勢を示す

John Bullyer and I met for the first time in 1956 when we were both in our sixties, but *it is true to say* that he did more to shape my life than

any other person.

(N. Lofts, *Forty Years on* / 福地 2003: 6)

この (13a-c) を (5)-(9) に当てはめてみよう。福地 (2001: 22-23) によると、(13a) の *this is a town* のような主節はそれ自体に含まれる情報量が実質的にゼロで、主題を明示する単なる統語枠としての機能しかない。また、Swan (2005) によると、限定的な関係詞節は簡単には省略できない。省略すると、容認されにくくなる。

14) a. *She married a man who she met on a bus.*

b. ?*She married a man.*

(Swan 2005: 480)

一般的に、結婚は男女間で行われるものであるから、この (14a) の主節 *she married a man* も伝えられる情報量が不十分であり、(13a) の主節と実質的に同様な機能である。このような主節には (9) の第3文の *I grew up* が該当する。(ただし、この例では、関係詞節ではなく、分詞構文が後続していることに注意せよ。)

(13b) は、福地 (2003: 5) によると、主節の内容を「背景」(地) として、従属節の述べる出来事が伝達の中心として前面に出ている場合である。これには (6) の第3-4文が当てはまる。

(13c) の主節 *it is true to say* は「本当のところは、実を言えば」のような意味で、*that* 節の内容を修飾する文副詞のような働きをしていると、福地 (2003: 6) は述べている。この例には (5) の第4文の主節 *it is ironic* と (8) の第2文の *was fortunate* が該当する。

したがって、(5)-(6) と (8)-(9) の例は (13a-c) のいずれかに当てはまり、主題展開による分析が文中のどの部分に情報伝達の中心があるのかを判別する道具立てとして有効であることを証明している。しかし、(7) の第5文の主節 *the world was surprised in the 1970s* の場合、話者の態度・姿勢を表すとは考えられず、(13c) の中に入れることはできない。この主節は「驚いた」という事実のみを伝えているからである。(13b) の背景的記述をすと言えるかもしれないが、福地 (2001, 2003) の論旨とやや少しずれがあるように思える。今後の詳細な検討課題としたい。

4. まとめ

これまでの例文の検討から、次のようなことが判明した。

- ・主題展開は主節を飛び越えて、その関係詞節や副詞節のような従属節や動名詞句、分詞構文、前置詞句に適用される。しかも、その部分は前置詞によって導かれる動名詞句や潜伏平叙文のこともある。
- ・マクロ主題が文ではなく、名詞句のことがある。
- ・一つの文中で、主節、副詞句、関係詞節が次々と主題展開に連なっていくこともある。したがって、主題展開は文の複数の部分に適用されることもある。
- ・主題展開に関わる部分は断定的であるが、この断定性の解釈は前後の談話内容に影響を受けることがある。
- ・副詞節が主題展開の一部となる場合、その副詞節を導く接続詞はその意味を保つだけでなく、談話内容の影響を受けて、感情を表す形容詞や過去分詞の *glad* や *delighted* に後続する内容節を導く *that* の機能を持つようになることがある。

紙幅の都合上、これ以上の検証は不可能だが、これまで見てきた例文はすべて主題展開に関わる主題・題述の部分は断定的であり、図の部分となり、その一方で、主題展開に関わらない主題・題述の部分は地となることを示している。

主題展開による談話の分析は古典的な手法ではあるが、談話の中で、文のどの部分が図となり、地となるのかを見分ける有効な手法になりうる。

参考文献

- Bloor, Thomas and Meriel Bloor (2004²) *The Functional Analysis of English*. Arnold.
- Daneš, František (1974) "Functional Sentence Perspective and the Organization of the Text." *Papers on Functional Sentence Perspective*, ed. by František Daneš, 106–128.
- 福地肇 (2001). 『英語らしい表現と英文法——意味のゆがみをともなう統語構造』研究社.

- 福地肇 (2001). 「情報量のない主節に続く関係詞節」『英語青年』 147(5), 22–23.
- 福地肇 (2003). 「主節・従属節の英文解釈」『英語青年』 149(4), 204–206.
- Halliday, M.A.K. (2004²) *An Introduction to Functional Grammar*. Arnold.
- Halliday, M.A.K. and Ruquiya Hasan (1976) *Cohesion in English*. Longman.
- Kajita (1977). "Towards a Dynamic Model of Syntax." *Studies in English Linguistics* 5, 44–76.
- McCawley (1981). "The Syntax and Semantics of English Relative Clause." *Lingua* 53, 99–149.
- Reinhart, Tanya (1984) "Principles of Gestalt Perception in the Temporal Organization of Narrative Texts." *Linguistics* 22, 779–809.
- 山口登 (2000). 「選択体系機能理論の構図」『言語研究における機能主義』 3–47. くろしお出版.